

常盤幼稚園だより



教育目標 健康な体と豊かな心の育成

めざす園児の姿 元気な子 思いやりのある子 よく考える子

郷土の偉人に学ぶ・幼少期の教育



園長 河田重三

2月14日(日)から、NHK大河ドラマ「青天を衝け」の放映が始まります。深谷の地に生まれた渋沢栄一がその主人公です。日本近代経済の父と称せられる渋沢栄一は2024年に新しい一万円札の顔になります。明治6年の第一国立銀行創立以降、設立や経営、出資などで関わった会社は500社に上り、同時に600もの教育や社会公共事業に携わっています。ドラマでは故郷・血洗島での23年間で人としての礎をどのように成長させていったかが前半の見どころです。

色白で丸顔の栄一少年は兄二人が夭折したため長男として育てられます。母は赤城下ろしの吹く中を近所の子供らと走り回る栄一を追いかけては羽織を着せようとしますが、栄一は羽織を放り投げてはまた走り出して遊んだと伝わっています。幼稚園の子供達が西風の吹く中でも走り、「暑い!」と言ってセーターを脱いで遊びに夢中になる姿に似ています。

また、5歳の頃より父親から読み書きの手ほどきを受けます。漢字三文字の言葉を編んだ「三字経」を父が読み、続いて栄一が真似して声に出すことから始まり、簡単な書物の読み方を教わりました。物覚えの良かった栄一は、7歳からは10歳年上の従兄である尾高惇忠の塾に通いました。惇忠の教え方は「論語」をはじめ多くの書籍を読みすすめさせ、意味は後で解説するものでした。ノーベル物理



電車ごっこ

学賞を受賞した湯川秀樹博士は幼少期に「論語」の素読(声に出して読むこと)で鍛えられたといえます。栄一の父や惇忠の教え方に通じています。後に栄一は、「今日の自分があるのは故郷での漢学のお陰である」と言っています。判断の拠り所を「論語」におき、一人の幸せのためではなく皆の幸せを求める「算盤」を経営の柱にして多くの百年企業を育てました。少年時代、身近な大人の働く様子を手本として手伝った家業の藍玉製造が商業への興味付けとなったと言えるようです。

体を鍛えることでは11歳から神道無念流の剣術を習っています。「腕前は田舎の初段」と謙遜して言っていますが、力強く健康な体をつくり、粘り強さや集中力、真剣に取り組む姿勢も鍛え上げらえたと考えられます。

また、村の鎮守である諏訪神社に伝わる獅子舞の技も上達させています。実業界で多忙な中でも祭りの日には帰郷し、「東京の歌舞伎を見るより血洗島の獅子舞がよい」と村人とともに見る獅子舞を楽しみにしました。渋沢家や尾高家には芸術的才能も見られます。もっている能力を引き出し、一流の人になるには子供のころからの鍛錬に心掛け、「十年、一万時間の法則」とまではいかないまでも、様々な分野での体験から得意なものを見つけて進めていけばその子は幸せだなと思います。



渋沢栄一は両親の深い愛情の下で育ちました。母の慈悲深さと父の誠意ある経営術を身に着けた青年は、挫折に会いながらも志を大きくして進み、今日の私たちを導いてくれています。

